

7. 火薬製造所の大爆発

フェイスブック掲載日 2021/8/3

終戦から 76 年目を迎える来月、8 月 16 日の五山送り火は、新型コロナウイルス感染「第 5 波」に見舞われ、昨年と同様に規模を縮小して行われるようです。

実は、1937(昭和 12)年の 8 月 16 日夜 11 時頃、宇治火薬製造所で大爆発事故が起こり、盆休みの最後の宵をくつろいで、寝所に入ったところの人々が一刻を争い着の身着のまま逃げまどう事態が発生しました。

知らせを受けた深草の陸軍第十六師団司令部は、警備隊を派遣し、秩序の回復を図ったが、それは住民の救援というよりも、軍機保持のためであり、被害の記録写真などの探索が行なわれたということです。(宇治市史第 4 巻)

軍はこの大爆発を「被害は極く軽微」と発表しましたが、深夜の 3 回にわたる大爆発で周辺の全壊家屋 142 戸、半壊は 139 戸など、大きな被害を受けるなど、実に、火薬製造所の周囲約 4 キロメートル四方に壊滅的打撃を与える大爆発でした。

この時の様子を京都大学名誉教授の故西山卯三博士は次のように回想されました。

「私はまだ応召前で、北白川の下宿で住宅調査集計の仕事に夜を更していた。午後 11 時すぎ、突然『ドーン』というにぶい爆発音をきいた。宵のうちは夕涼みの人でにぎわっている北白川の通りも、その頃は人影がなくなっていたが、驚いて表に飛び出す人もいた。大陸で始まったばかりの戦争を思いあわせ、人びとは不安気に話しあった。爆発音は二、三回聞いたが、東山にさえぎられて光芒はみえなかった」(『戦争と住宅』)。

洛北の北白川で爆音がとどろいたというのだから、爆発のすごさが窺い知れます。ちなみに西山博士は事故の翌年、陸軍歩兵少尉としてこの宇治火薬製造所に赴任することになりますが、赴任したときにはすでに、爆発で破壊した土塁の復旧工事がすすんでいたそうです。

ところで、宇治川を挟んだ西側に、旧宇治町小倉村がありました。宇治市立図書館に小倉村郷土会発行の「郷土」という小倉村機関紙が縮尺版で保存されており、昭和 12 年 9 月 15 日付けの紙面「時報 宇治火薬作業場の爆発」との見出しで、宇治火薬製造所の爆発事故に関する記事がありました。読んでみると、「去る 8 月 16 日午後 11 時 20 分頃宇治火薬製造所作業場の一部爆発、深夜の夢を破られた村民は戸外に飛出し、学校、茶園、竹藪其他へ避難した。損害は窓ガラス多数を破損した程度で人畜に被害がなかった。」との記事になっています。

軍の発表を受けてのことですが、事実をねじ曲げるこの姿こそが、政治の恐ろしさを物語っていると思います。権力者の意向を先回りして忖度することが戦争を支える保

証になったと思います。小倉村という小さな村の小さな機関紙ですが、日本の隅々の小さな単位で、こんなことがおこっていたのです。「先回りして忖度」は「モリカケ」問題や「桜を見る会」問題など、今も昔も変わりません。

